

作品名をクリックすると作品に移動します。

### 第三十六回「全国高校生読書体験記コンクール」中央入賞者一覧（敬称略）

#### 【文部科学大臣賞】

沖縄県立那覇国際高等学校三年

武田 萌

ゼノフォビアと難民問題

（体験書籍『路上のストライカー』マイケル・ウィリアムズ・作、さくまゆみこ・訳）

#### 【全国高等学校長協会賞】

筑波大学附属聴覚特別支援学校高等部一年

渡会由貴

見えない魔物との付き合い方

（体験書籍『空気』の研究』山本七平・著）

#### 【全国高等学校長協会賞】

広島県立大門高等学校三年

國岡志帆

「二番目の悪者」が笑うこの世界

（体験書籍『二番目の悪者』林木林・作、庄野ナホコ・絵）

#### 【一ツ橋文芸教育振興会賞】

北海道札幌南高等学校二年

川岸夕夏

地図を歩く

（体験書籍『地図の中の札幌』堀淳一・著）

#### 【一ツ橋文芸教育振興会賞】

静岡県立掛川西高等学校二年

松下ひかり

山に魅せられて

（体験書籍『孤高の人』新田次郎・著）

#### 【一ツ橋文芸教育振興会賞】

兵庫県立香寺高等学校一年

西岡美空

言葉を超える「お話し」

（体験書籍『きよし』重松清・著）

#### 【一ツ橋文芸教育振興会賞】

高知学芸高等学校二年

公文琴音

私の在り方

（体験書籍『ニーチェの言葉Ⅱ』フリードリヒ・ニーチェ・著、白取春彦・編訳）

#### 【一ツ橋文芸教育振興会賞】

宮崎県立宮崎西高等学校一年

増田悠斗

「死」によっても失われないもの

（体験書籍『夏の庭—The Friends—』湯本香樹実・著）

## 第三十六回全国高校生読書体験記コンクール

【文部科学大臣賞】

### ゼノフォビアと難民問題

沖縄県立那覇国際高等学校三年

武田

萌

私がこの本を読んだのは二度目だ。留学を終えた私がもう一度読み、考えたことは一度目のときとは大きく異なっていた。

主人公デオは大統領派による虐殺で母と祖父を失ってしまふ。兄と共に故郷ジンバブエを離れ南アフリカを目指すが、その道中向けられるのは外国人である彼らへの軽蔑や憎悪の眼差しばかりであった。

外国人嫌悪のことをゼノフォビアという。私は実際にそれについて考えさせられる経験をした。私は去年の夏から一年間スウェーデンへと留学した。スウェーデンは難民や移民の受け入れに積極的で、私が住んでいた町でもムスリムの人たちをよく見かけていた。その中で、二年前に難民としてシリアからやってきた男の子と友達になった。彼は気さくで、スウェーデンの暮らしにまだ慣れていない私の良き理解者となってくれた。彼と会うまでは、私はテレビのニュースなどで難民と聞くと、暴力的で受け入れ国の文化を乱しているというようなネガティ

ブなイメージを持っていた。そういったイメージは彼のおかげでがらりと変わったが、同時に私は自分自身を恥ずかしく思った。私自身も日本からやってきた外国人だというのにもかかわらず、彼らをよそ者だと認識し、理由の無い嫌悪感を持っていた事に気づいたからである。自分とは違うからなんとなく嫌だ、そんな勝手に無知な決めつけがゼノフォビアへの入口なのだろう。

スウェーデン滞在中、実際にゼノフォビアが原因で移民の子どもたちが殺される事件が起きた。隣町ということもあり、この事件はとてもショックな出来事だった。もしかしたら殺されていたのは私の友達だったかもしれないし、私自身であった可能性もある。外国人だから、そんな理不尽な理由で奪われてしまふ命が世界中にあるのだ。本の中で、デオの兄も外国人排斥の暴動に巻き込まれ殺された。家に火をつけられ、見つければ銃で撃たれる。ここで描かれている暴動はフィクションではなく、二〇〇八年に南アフリカで実際に起きたものがモデルになっているという。

難民の場合、故郷は戦争で破壊され、戻ることは困難である。私は一度シリア人の友達に、故郷が恋しくならないかという質問をしたことがある。彼は、「シリアには戦争がある。僕はそれから逃げてきたんだから、もう戻りたくないよ。」

と言った。それを聞いて私は悲しくなった。帰ることができ、帰りたいと思える故郷があることがどれだけ恵まれているか実感した。彼らは一生を過ごす覚悟で新しい土地に足を踏み入れるのだ。

だが難民としての生活は決して楽なものではない。難民キャンプで国連の職員がデオに尋ねる。「朝起きたとき、あなたはまず自分はデオだと思う？ それとも難民だと思う？」それにデオはこう答える。「難民だよ。難民と呼ばれるのは嫌だけど、ほかの者にはなりようがないんだ。」初めて読んだときは気にも留めなかった言葉だが、今の私には鋭く突き刺さった。実際に難民として生活する人たちと関わり、これらは彼らの多くが抱えている問題だと気づいた。個人としてではなく、まとめてよそ者として扱われる。時には嫌悪感を向けられることもある。その間中、彼らは難民でしかいられない。それがデオの言う「ほかの者にはなりようがない。」ということなのだろう。

違う民族同士が共に生きていくのはそんなに難しいことなのだろうか。日本でも未だに日朝鮮人へのヘイトスピーチや差別が続いている。沖縄でも米軍アメリカ人を嫌う県民は多い。それらには文化、歴史、社会、様々な背景があり、彼らが起こす暴力事件への怒りなども含め、複雑に絡み合っている。だが根本的な原因は相互の不理解なのではないだろうか。お互いのことを知らなさすぎるために嫌悪感や恐怖心を持ち、拒否反応を

示してしまう。

デオは兄の死後、ストリートサッカーチームのスカウトを受ける。集められたメンバーには南アフリカ出身の選手と難民としてやってきた外国人選手がおり、彼らは対立していた。だが、お互いの辛い経験を知り、理解し合った彼らは本物の仲間になる。彼らがそうなることができたのは、お互いを一人の人間として尊重することができたからだと思える。事実、私もシリア人の友達ができたことで、「難民」というくくりで彼らを見なくなつた。彼らは私たちと何も変わらない。同じような悩みを抱え、同じように冗談を言い合い、同じように生活している一人の人間なのだ。当たり前のことかもしれないが、彼らを大きくなくくりで見るとはなく、一人の人間として見る。この変化こそがゼノフォビアを無くし、様々な人種が共生するための糸口になると私は信じている。

#### 体験書籍

『路上のストライカー』マイケル・ウィリアムズ・作  
さくまゆみこ・訳

## 第三十六回全国高校生読書体験記コンクール

### 【全国高等学校長協会賞】

## 見えない魔物との付き合い方

千葉県 筑波大学附属聴覚特別支援学校高等部 一年

渡会 由貴

「KY語」という言葉を知っているだろうか。以前、「JK(女子高生)」を中心に流行した、ローマ字表記した単語の頭文字を取った略語のことだ。その代表的な表現である「空気が」「読めない」の頭文字をとって「KY語」と言われるようになったそうだ。

そんな「空気」に関する本を、私はこの夏読んだ。日本人にとって常に判断の基準となるものは「空気」だと説く『空気の研究』。その「空気」とは何だろう。作者は「教育も議論もデータも、そしておそらく科学的解明も歯がたたない。何か」であり、「非常に強固でほぼ絶対的な支配力をもつ『判断の基準』」だと述べている。例えとして、第二次世界大戦での戦艦大和の沖繩への出撃を引用しているが、知識も見識も情報も持っていた軍司令部が無謀な作戦を実行したのは、「ああせざるを得なかった空気」があったためだと結論付けている。

我々日本人は、「空気」をととても大事なものと考えている。

会話の際に、意識して曖昧な表現や婉曲な言い方をするところがある。そして、会話の間合いや語尾に含まれる感情などを推し量りながら、話を繋いでゆく。そこに流れる空気を敏感に察知し、壊さないようにする。つまり、「的確に空気を読む」ことをとても大切にしているのだ。

そんな空気を、実は私はこの本を読むまで意識したことがなかった。しかし今考えると、空気によって誤った行動をしてしまった過去がある。一人の友達に意地悪をしてしまったのだ。「遊びのつもりでやってしまった」「教室全体がなんとなくそんな空気だった」としか言えない。結局そのとき教室にいた全員が明確な理由を説明できるわけもなく、担任の先生に厳しく注意を受けた。今でも時々思い出しては深く反省する、幼い頃の出来事だ。

見えないけれども確実にそこに存在し、時には誤った判断をさせる。そんな「空気」について悲しい言葉を聞いたことがある。「聴覚障害者はKYだ」というものだ。実を言うと、私は生まれながらの感音性難聴で、物心がついたときにはすでに補聴器を装着していた。地域の療育センターや聾学校で、発音や言語獲得の訓練を受けてきた成果で、今では、やや不明瞭ながらも音声での発語や、年相応の知識を習得できたと思っっている。しかし実際の会話では、話の流れを手掛かりに、聞こえる音(言葉ではない)と相手の口形を見て、どんなことを言ったのか推

測して返事をしている。そのため、ぼそつとつぶやいたり、途中で濁した言葉は、無かったものとなるのだ。そのうえ、話を聞きつつ言葉の組み立てを必死で探っているため、微妙な表情の変化までは見えてはいないのだ。このような難聴の特性が、空気が読めないと言われてしまう理由の一つかと思うと悲しくなった。

その一方で、私には「空気を気にし過ぎる」面もある。会話の途中で、たとえ相手の言うことが分からなくても、その場の空気をなんとか乱したくない一心で、曖昧な微笑みを浮かべてしまうのだ。それを家族や友達との間だけでなく、大切な場面でも使ってしまった。この夏、ある大学のオープンキャンパスに参加した。事前に難聴だと伝えていたため、職員の方が個別に学内を案内してくださったが、顔の向きや口調によっては聞き取れないところがあった。しかし、私はこの微笑みを浮かべながら、さも理解しているかのようにうなずいていた。これは、ただ自分が情報を得られなかっただけでなく、時間を割いて案内してくださった方にもとても失礼なことだった。また、同じくこの夏、ある大学の科学教室に参加した際に、空気を気にするあまり、誤った行動をとってしまった。この時も事前に障害の程度を知らせていたため、丁寧に説明していただいた。しかし、実験を進めるうちに作業に夢中になり説明を聞き逃していた。「わかった？」と聞かれたときには、周りの人は

着々と作業を進めていて、早く次の作業へ進みたいという空気ができていた。その空気に逆らい、もう一度説明してもらおうとはできず、ついいつもの微笑みで答えてしまったのだ。当然次の作業が分からず、後から聞き直しに行っただけの言うまでもない。これは、特に社会に出た場合には致命的な失敗につながりかねない出来事だった。

私たちが人との関わりを持つ際、確実にそこには空気が存在する。空気の流れて皆の心が一つになることもあれば、孤立してしまうこともある。歯が立たず、ほぼ絶対的な支配力を持つ空気はまさに魔物である。その魔物に流されるばかりでは、取り返しのつかない失敗を招くこともある。その場の空気に従うべきか否かを判断し、時には空気を乱してでも自分の判断に従う勇氣が必要だ。しかしそれは教えられて身につくものではないのだ。多くの人と関わり、経験を積むことによって培われていくものなのだ。そのことを常に意識しながら生活していきたい。

体験書籍

『「空気」の研究』山本七平・著

### 第三十六回全国高校生読書体験記コンクール

#### 【全国高等学校長協会賞】

## 「二番目の悪者」が笑うこの世界

広島県立大門高等学校 三年

國岡 志帆

「これが全て作り話だと言い切れるだろうか——」この言葉から物語は始まる。この本の中には、登場人物こそ全員動物ではあるものの、私達の日常生活に隠された闇がそっくりそのまま描き出された世界が広がっている。「作り話なんかじゃない!」読み終えてすぐ、私はそう確信した。同時に「私は『二番目の悪者』になってしまっただけじゃないか——」。心の中で自分に何度も何度も繰り返し問い掛けずにはいられなかった。私も金のライオンの欲を満たす為の道具として、銀のライオンの悪い噂を広めてしまった多勢と同じ位置に立ってしまったてはいないかと。しかし、真実は分からない。なぜなら「考えない、行動しない、という罪」は私達が無意識の内に犯すことが可能な罪だからである。だから噂話は回る、回る。今、この瞬間も彼らは軽い足取りで私達の間を駆け巡り、その裏に隠し持った強大な力で私達を取り囲むこの世界を一変させようとしているのだ。

私は、中学校、高校生活を送る中で二度、嫌がらせを受ける

という経験をした。中学生の時は、授業中に発言すれば先生に對して良い子ぶっていると悪口を言われ、昼食時間もうすら笑いを浮かべた顔でこちらを見つめてヒソヒソとささやかれた。掃除時間になると、無視はまだ良い方で、面と向かって笑いがらひどい言葉を浴びせ掛けられたりもした。高校生になっても、同じ様な経験を一度だけした。経験をもつてすれば分かる。本当に悪いのは嫌がらせを始めたある一人。だが、本当に怖い存在なのは、直接、真実を確かめようともせず、ある一人に便乗して私を取り巻く多勢。つまり「二番目の悪者」なのだ。人間という生き物は、周囲の人間と生活面は勿論、精神面においても支え合いながら生きていく。これは裏を返せば「一人では不可能なことも多勢なら成し得る」ということだ。残酷なことに、人の心を傷つけるといふ行為でさえも多勢が集まれば、そこには「責任のたらい回し」が生まれ、仲間にも囲まれた安心感をは心を麻痺させる。そして、自分の行為にかかる責任の重さを軽んじるといった傾向が生まれるのだ。こうして、真の悪人の思わく通りに、自分の意志を持たない「二番目の悪者」が生まれる。

「二番目の悪者」のうちの一人の口から謝罪の言葉と共にある言葉がこぼれ出たことは今でも鮮明に思い出される。

「一緒に嫌がらせしないと自分を標的にすると言われたから——」。

つまり、彼女に悪気など無かったのだ。しかし、彼女の言動は一人また一人へと伝染していき、多勢を無自覚のうちに「二番目の悪者」へと陥れたのだ。金のライオンから言われたままに、銀のライオンの悪い噂を吹聴してしまった彼らの声が確かな音を付け、私の耳に情けなく響いた。同じく彼らに悪気は無かったのだ。

銀のライオンとあの日の私は、確かに同じ場所に立っていた。根も葉も無い噂の広がりにはただ苦笑いしただけで何も言わなかった銀のライオンの心情が私には痛い程、理解できる。「誤解はいつか必ずとける」そう信じていたのだ。当時、気付かなかっただけで、物語と同じ様に、空に浮かぶ真っ白い雲は眩しいたのかもしれない。「嘘は、向こうから巧妙にやってくるが、真実は、自らさがし求めなければ見つけられない」友達から聞いた「らしいよ。」の言葉を私は果たして日々どう受け取めているか——。インターネットなどで見たニュースを鵜呑みにしてしまっていないだろうか——。認めたくはないが、もしかすると自分も「二番目の悪者」かもしれない。加えて、この罪は私だけではなく、想像以上に多くの人が犯しているはずだと思ふ。なぜなら、毎日大量の噂が「らしいよ。」を文尾に付け、出回っているからである。それらが、マスメディアの誤報道に繋がる程、この世界に甚大な影響を与えていることを忘れてはならない。日々の自分の行動を振り返ってみると、時間に押し

流されて自分の犯した罪の存在と本質について考えていなかったと気付かされた。ネット社会が広がる近年、この事はより大切にするべき教えであると思つた。

「二番目の悪者」——。彼らの犯す罪は何より容易に、気軽に犯すことが可能であり、その存在と罪の意識は真の悪者の影に隠れ、掴みにくい。だからこそ、自らが気付き、改めようとする機会も掴みにくいのだ。「嘘は、向こうから巧妙にやってくる」恐怖を知っている者であるからこそ、私は自分の行為に今まで以上に意識を向ける決意をした。「考えない、行動しない、という罪」を無意識という私の心の空白のすき間に決して入り込ませぬように。私は必ず「二番目の悪者」から抜け出す。実行に移すことで学び得たことを活かしたい。

この世界の「二番目の悪者」に告ぐ。私が今、確実な一歩を踏み出したことを——。

体験書籍

『二番目の悪者』林 木林・作  
庄野ナホコ・絵

## 第三十六回全国高校生読書体験記コンクール

### 【一ツ橋文芸教育振興会賞】

## 地図を歩く

北海道札幌南高等学校 二年

川岸 夕 夏

はじまりは二〇一四年八月、ちょっとした好奇心がきっかけだった。文庫判の市内地図に、自分の足跡を記そうと思いついた。徒歩もしくは自転車を通った道を、ペンでなぞる。当時からよく散歩していたから、いつもどこを歩いているのか気になっていた。記録することで何か見えてくるかもしれないという小さな期待もあった。それから二年あまりが過ぎ、学校や家の周り、中心部は一面がすっかり真っ青になった。今では出かけるときには常に地図を持ち、帰ってからルートを確認するまでがひとつの楽しみである。地図はただ行き先を示すガイドではない。自分が通った道を振り返り懐かしむ、そしてこれからどこへ行くのか想像を膨らませる。

そうして地図を眺める機会が増えるうちに、私が身の周りの風景に無頓着だったことに気がついた。「この道はどうして曲がっているのだろうか。」「ここはなぜ番地が飛んだのだろうか。」学校の図書館の本棚を眺めていると、この本の背表紙が目に見

びこんできた。『地図の中の札幌』。

地図がページを覆う。いちいち目を凝らしてみたくなるから、ページを進めるにもやけに時間がかかった。読めば読むほどに、私の意識はだんだんと線と線の交差、黒い地名の連続へと吸いこまれて、あたかも街を散策しているようだった。

地図は、決して整然としていない。碁盤の目と称される札幌においても、だ。条丁目制が市全体に均一に広がるとは限らない。歪みが各地に生まれている。

この本では、その多くの歪みについて由来を説明している。たとえば、中心部から少し離れたところに「山鼻」という地区がある。市電がごとごと走る音と、架線が張り巡らされた低い空が無性に好きで、よく散歩している。ここを地図で見ると、不思議なことに中心部に敷かれた真四角の区切りから、わずかにずれている。まるでここだけ首を傾げて見ているかのように、縦にも横にも同じ角度だけ違う。なのに無理をして中心部の条丁目制を敷こうとするから、至る所で食い違いが起る。西十八丁目の隣が西二十丁目、ということや、ある一つの街区だけが妙に大きかったり小さかったりする。これには理由があった。山鼻地区は、「山鼻村」として中心部の「本府」とは別に栄えた過去がある。互いに干渉せずに発展してきたのだろう。その結果、合併する際にずれが生じてしまった。条丁目制を敷こうとした先人の苦勞が偲ばれる。

川がうねうねと曲がっている、はたまたひたすら直線に流れていること、あるいは線路が湾曲して敷かれていることにも、今住んでいる地名にも、必ず理由がある。ほんやり歩くだけでは知り得なかった過去を、地図で辿る。

街が一夜にして突然生まれることなどない。人が携わり自然が手を貸した歴史が、そこにはある。私の目を通して平面の地図が徐々に立体となつて、ただの記号や線の交差が明確な形となり、浮き上がってくる。歴史と共に、その地の思い出、風景、音、匂いや手触りがありありと感じられるようになってくる。やさしい息づかいによって、五感を突き動かされる。

地図には私自身の足跡も含まれている。「この道なんか、中学校のときに毎日往復していた。冬の早朝、澄んだ空気が体に染みて気持ちよかった——」「地名に惹かれて行つたはいいけれど、坂道ばかりでしんどかった。でも、くねくねした道は味わいがあつてよかった——」青くなぞられた線の一つひとつにも、ストーリーがある。

札幌という街そのものが、私の中の思い出と深く結びついているのだ。少し歩けば畑の田舎めいた匂いにだだっ広い空があり、少し地下鉄に乗れば賑やかな街が待っている。地図によって、私の札幌への愛情がいつでも確かめられる。地図を仲立ちにして、今の私と札幌の街とが時を超えてつながり対話している。

自分がどうもやるせなくて、やることなすこと全てが翻つて虚しくなるときがある。私はまだ十七歳でしかなくて、将来どう歩いていけばいいのか、考えても考えても途方に暮れるときがある。そういうとき、私は自分の足で地を踏む感覚を味わいたくて、外に出る。そして自分で見た景色を頭に焼きつけて、地図を読む。次第に、迷いにだつて意味があるという気になつてくる。糸の絡まりにだつて必ず価値がある。地図と同じだ。私は地図によって、まだちょっとしか姿が見えず全体像が掴めない世界との調和をはかっている。歪みを見つけてぐつと目の前が開ける瞬間がある。地図は、私の歩みを確かめさせ、時の流れを与え、そして明日への手がかりになる。私は、時間の積み重ねの上に生きている。

体験書籍

『地図の中の札幌』堀 淳一・著

## 第三十六回全国高校生読書体験記コンクール

### 【一ツ橋文芸教育振興会賞】

## 山に魅せられて

静岡県立掛川西高等学校二年

松下 ひかり

青い雲海と空の境が徐々に白み始めた。朝日だ。力強く、それだけで優しい光が辺りを包む。振り返ると、朝日に照らされた北岳がその秀麗さに輪をかけて、神々しく見えた。目には見えないが、何か強い力を感じた。辺りは静寂に支配されていたが、確かな山の鼓動が、澄みきった空気を通して私に届いた。あの人も、この鼓動を聞いただろうか。

八月十一日、カレンダーの数字は赤い。祝日「山の日」である。何でも、山の恩恵に感謝し自然に親しむ日なのだそう。そうだけでなくとも最近の登山ブーム、夏山は登山者で大賑いだろう。そう言う私も、四年前から山に魅せられた一登山者ではあるのだが。

登山は日常生活を忘れさせてくれる。ただひたすら、黙々と登る。父と二人、歩くことに集中するから、お互い無口だ。余分なことを考えている暇はない。登山はいつでも危険と隣合わせだから。私は多分、そんなふうにより日常から離れることに惹か

れていたのだろうか。あの人、この作品の主人公である加藤文太郎はどうだっただろうか。彼は「なぜ山に登るのか」という問いの答えを探すために山に登っていた。山が好きだというだけでは言いきれないほどの異常な執着心。命まで賭けた山という存在は、彼の中で、愛する妻や我が子の存在よりも勝っていた。そこまで彼を山に惹きつけたもの、それは、孤独との闘いの先にある自己の成長であった。

今まで私は、孤独を誤解していた。一人でいることが楽で、好きだった私は、自分を孤独な人間だと勝手に思い込んでいた。しかし彼が冬山で経験する本当の孤独を知ってから私は決して孤独ではないと気づいた。私の側には、頼れる人がいた。山では父が、学校では友人もいた。それが何よりの証拠であり、彼の冬山山行にないものだった。

「単独行の加藤文太郎」これは彼の愛称であり、彼にパーティーを組ませなかったレットルでもある。夏山は良かった。美しいお花畑や木々の緑、野生動物が彼の孤独を癒した。しかし冬山は違った。色彩のない、ただ、ただ白い世界で、寒さよりも孤独が彼を苦しめた。冬山という死に近い場所で、頼れるのは自分だけだった。彼は孤独と闘いながら、幾度となく人を求めた。だが単独で冬山に挑む彼の非常識な山行は、多くのパーティーに拒絶された。彼はいつも、孤独に打ち勝とうとする心と、人を求める心との間で葛藤した。

彼が山で孤独を感じるように、私も山で寂しさを感じたことがある。日常から離れたという思いで山に登っても、山頂で、あの美しさや雄大さに触れてしまうと、ちっぽけな自分を思い知らされるのだ。人間の力など到底及ばないものへの畏敬の念は、日常を懐しむ思いに変わる。大自然から目を逸らすのだ。

山々の果てにあるはずの自分の家と思う。学校を思う。家族を、友人を思う。山とは人間界の中にあるようで、ないようだ。山で感じる孤独や寂しさは、異世界に来てしまった人間に共通のものなのかもしれない。だが、私を感じた寂しさと、彼の感じた孤独には、天と地ほどの差があることは明確だ。

一方で、孤独は彼の山行を成功に導いた。頼れる人はいない。信じられるのは自分だけだ。一人だという責任が彼を守った。どんなに困難な状況に追い込まれても、彼は生還した。様々な困難を乗り越え、生きていく力を彼は山で養った。豊富な経験に基づく自信は彼を人間として成長させた。孤独との闘いは苦しいものだが、その先には自己の成長があった。貪欲に限界を知らず、自己の成長を求め続ける。冬山の美しさ、そして厳しさは、彼の要求に十分に応えた。彼が山に惹かれ、命を賭けてまで求めたものは、山そのものではなく、登山という行為の中にあるものだったのだ。

私は今まで、一時的に日常を忘れるために山に登ってきた。それで満足だった。しかし今夏の北岳への登頂を経て、少な

らず自己の成長を感じた今は違う。孤独と闘ったわけではないが、二日目の行程で、一日に二つの山を越え、更に二千メートル以上も下るといふ困難を成し遂げた。解決すべき課題もあるが、今回の経験は自信となつて、私の体と記憶に刻みつけられた。

下山後の車の中、高揚感の抜け切らない私は、父に今後の山行の話を持ちかけた。すると父は、しみじみと、こう言った。

「俺も後、何年登れるか分からんからな。」何年後になるか分からぬ。しかし、確実に私は一人で登山をすることになるだろう。そのとき、加藤文太郎のように、誰にも頼らず自分を信じ続けられるか。今のままの自分では到底無理だ。だが、諦めるつもりはない。まずは日常生活で、自分に責任を持ち、人に頼ることをやめる。私は目の前に伸びる登山道を一步一步踏み締めて歩いていく。加藤文太郎、あの人の背中を追って。

体験書籍

『孤高の人』新田次郎・著

## 第三十六回全国高校生読書体験記コンクール

### 【一ツ橋文芸教育振興会賞】

## 言葉を超える「お話」

兵庫県立香寺高等学校 一年

西岡 美空

妹を抱きしめ、きよしこのように私も伝える。「それが、君のほんとうに伝えたいことだったら……伝えるよ、きつと」と。それが、私の「お話」の第一歩だ。

私は今年の夏、きよしという一人の少年と出会った。少年は吃音のため、うまく自分の思いを伝えられない。だが、色々な人との出会いを経て、自分の言葉で気持ちを表現していくことを決意する。悩みながらも、ゆっくりと成長していく少年の歩みを私は辿った。そして、少年との出会いは、私に変化を起すきっかけとなった。

私の妹は発達障害の影響で自分の思いをうまく話せない。原因は違うが少年と同じだ。少年は吃音に悩み、伝えられない思いと戦い続けた。その歩みを辿って私はただただ後悔した。思いを言葉にできないつらさは、少年に教えられるまで考えてもみなかったからだ。妹は少し自分勝手に粗暴なところがある。だが、それは自分をうまく表現できず、悩み、自暴自棄になっ

ている部分があるからかもしれない。もっと妹のことを理解したい。思いを、もつと受け取りたい。そう強く思うのは妹からもらった数十枚の手紙を、私は無駄にしてしまったと思うようになったからだ。

私が中学生の頃から、妹は時々手紙をくれた。内容は二人でどこかに行きたいとか、ゆっくり話したいといった、私が高愛ないと思ったものだ。だが、裏には自分をわかって欲しいという切実な思いがあったのではないか。少年が「きよし」という思ったことを何でも話せる友達を欲しがったように、妹もまた私に自分を受け止めて欲しかったのではないか。少年のように、妹は悩み、苦しんでいるのではないか。それなら、今すぐ妹を抱きしめよう。妹の「きよしこ」に私になる。

だが、本当にそれでいいのだろうか。重松清はこの「お話」を少年と同じく吃音で悩む一人の少年に向けて書いたとしている。私はこの本の主題を『ほんとうに伝えたいこと』なら伝えられること』だととらえている。だが、そうしたメッセージなら「お話」にせずとも手紙でもいいはずだ。なぜ、「お話」という形式をとったのだろう。そう考えると、直接妹に思いを伝えればそれでは思えなくなってくる。

メールより、手紙より、電話より、直接会って話をするのが一番思いを伝えられる。それは確かに実感できる。では、何のために私たちは言葉を磨いてきたのだろうか。直接会って話

をするという手段は、本当に思いを伝える最良の方法なのだろうか。

私はもう一度考える。なぜ、妹は手紙という形式をとったのだろうか。そのヒントを探り、私はもう一度妹からもらった手紙を全て読み返した。そして、気づいた。私はこの手紙の内容を直接言われても、冗談だと思っただけかもしれない。本当の思いだと思わないかもしれない。妹が思いを伝えるには、手紙でなければならなかったのだ。

言葉によつてすれ違いながらも、言葉以外で思いを伝えることはできない。だから、私たちは言葉を磨いていく。磨きに磨いた幾千言を精緻に組み立て、自分の思いを表現する。魂を削るような、自分の全てを打ち込んで築いた「お話」によつて、言葉を超え、思いを伝えていくのだ。それが「表現」というものであり、磨き抜かれた「表現」は時代や国を超えて思いを伝えられる。だから、私たちは「源氏物語」で光源氏の苦悩に思いをはせることができ、『星の王子さま』から言葉を超えた感動を受け取ることができる。「それがほんとうに伝えたいことだったら」伝わっていくからこそ、言葉で「表現」しようとしていくのだ。それが優れた表現であれば、その媒体は問わないのではないか。映画やドラマでも、マンガでも、LINEであっても、言葉を駆使して「表現」し、思いを伝えられる。そう考えると、本当にわくわくするような言語環境に私たちは包ま

れている。

妹を抱きしめ、きよしこのように何でも話してもらおう。それは、私が勝手に理想とした幻想だ。妹は、手紙という形で私に思いを伝えていた。そして、その思いは今受け取ることができた。私には、私にしかできない表現がある。その、自分にはできない「表現」を探していくことが何よりも大切なのだ。私が出会った少年は、吃音を気にし、話すことをあきらめた時もあった。青年との境目となる頃には、自分の代わりに話してくれる恋人と出会い、吃音の悩みは大きく減った。だが、最後には自分の言葉を求めた。自分の言葉で自分を表現したいと願った。私も妹も少年のような強さはない。それでも、自分で「表現」することから逃げてはいけないうちに思う。どんな形でも、自分の思いは自分の「表現」で伝えていきたい。だから、私はきよしこにはならない。妹と二人で、私たちの「表現」を見つけていきたい。その第一歩を、私は踏み出した。

体験書籍

『きよしこ』重松 清・著

## 第三十六回全国高校生読書体験記コンクール

### 【一ツ橋文芸教育振興会賞】

## 私の在り方

高知県 高知学芸高等学校「二年

公文 琴音

「悩みとかなさそう。」私が生きてきた十七年間で何百回と言われた言葉だ。

私たち人間が生きていくうえで「悩みがない」などということはありえるのだろうか。私が思うに人間とはつねに悩みと隣り合わせで生きている。純真無垢な小学生、思春期真っ只中の中高生、大人に近づく大学生、必死に働く社会人、余生を楽しむ過ごす高齢者。彼ら全員何かしらの悩みをもっているはずだ。書店を訪ねてもこれだと思える作品を見つけられず手ぶらで帰ってきた私の目にとまったのは居間の机に置かれていたこの本だった。まるで私が手ぶらで帰ってくることを最初から知っていたかのようにその本は私の目の前に現れた。

手にとってまじまじと見つめてから気がついたのだが、この本を読む父の姿を見かけたことがあった。きっとここで父が読んでいたのだろう。

私は昔から周りの空気を敏感に感じとることができた。いわ

ゆる「空気をよむ」能力が幼いながらに備わっていた。相手が望む言葉を返し、相手が望む空気を作った。そして、そんな私の在り方はこの本での否定の対象であった。

「自己をあらわにせよ」この言葉の本当の意味が分かったとき、恐ろしかった。そして悲しくなった。

私はきっと心のどこかで優越感に浸っていたのだろう。ひとつの枠に囲まれた空間を私は枠に入ることなく外から眺め、一人大人ぶっていた。そしていつのまにか自分の考えをなくしていた。空気をよみすぎて自分も空気になってしまっていたのだ。自己をあらわにせず周りに同調してばかりの人間の在り方は空気だった。

それが分かった時、恐怖や悲しみという感情は生まれたが、驚きというものは全くなかった。自分の中で分かっていたのかもしれない。自分は周りにとって空気なのだ。そして心のどこかで私はその在り方を心地よく感じていたのだと思う。本当の自分を知られたくないがために人と深く関わることを避けていた。

人間は誰でも心の奥に本当の自分を隠し持ち生きているとは思っている。そして多くの人はそれを理解していないのだろう。自分でも分からない本当の自分の存在。きっとそれが分かっってしまうと人は弱くなるのだろう。皆必死に自分を強く見せようとしているのだ。

しかしながら、人間とは一人で生きていけるはずもなく、弱い自分を見せられる場所を見つけるのだ。枠の外にいた私にはその場所がなかった。そして私は気づいたのだ。

「悩みとかなさそう。」この言葉が私に何故こうも多く投げかけられるのか分からなかった。この言葉が意味していたのは私の周りへの関わり方だった。

友達はたくさんいるが、「親友は誰？」という質問には答えられなかった。本当の自分を決して見せず、深く関わることをしなかった自分。周りが私に悩みがないと思うのも当たり前なのだ。それをかたくなに見せなかったのは自分なのだから。

十七歳にしてようやく自分を理解した時にとてつもなくさびしい気持ちになった。今まで自分の中で保ってきた何かがいっきに崩れ落ちた音がした。

しかし、ニーチェは私に救いの手を差し伸べてくれた。

——自己をあらわす場所がない人はさびしい人だ。だがとても強い人だ——

このことに気づいたとき、何か熱いものがこみあげてきて、私のほほをぬらした。完全に崩れ去ったと思ったものが少しずつたちなおり始めた気がした。

私は自分を隠すのに必死だった。だからこそどんな時でも自分を隠すカーテンとして笑顔を作っていた。弱さを隠すための嘘をたくさんついた。それらのずるい行動をニーチェは強いと

言ってくれたのだ。

私は今もまだ『空気をよむ』ことを決してやめない。それが私の在り方だから。ただ一つ変わったことがある。思い切った枠の中に飛び込んでみた。ちゃんと近くで人の気持ちを感じることにしたのだ。

世界は百八十度変わった。ニーチェの言葉で私の世界は変わったのだ。人の温かさを近くで感じ、人の持つさびしさを近くで感じた。相談できる親友ができた。

悩みをもつ人間の心情は様々だが、それときちんと向き合いながら全員が人生を歩んでいる。「悩みとかなさそう。」この一言に込められたたくさんさんの意味を理解し私は成長することができた。

ただの空気だった私が十七年目にしてやっと口をもつことができた。自分の本当の在り方によりやく気が付いたのだ。

#### 体験書籍

『超訳 ニーチェの言葉Ⅱ』フリードリヒ・ニーチェ・著  
白取春彦・編訳

### 第三十六回全国高校生読書体験記コンクール

#### 【一ツ橋文芸教育振興会賞】

## 「死」によっても失われないもの

宮崎県立宮崎西高等学校 一年

増田 悠斗

私は母の卵焼きが大好きだ。毎日、お弁当に入っている。だしが利いていて、甘めの卵焼きである。母はこの卵焼きの味付けを、幼い頃一緒に暮らしていた祖母、私の曾祖母に教わったそう。曾祖母は、私が生まれる前にはすでに亡くなっていた。だから、曾祖母の顔は、仏壇に飾ってある写真のみでしか知らない。ふくよかで優しい笑顔である。私は会ったこともない曾祖母の味が大好きだということになる。

人間、いや、生きているものはみな、この世に生まれてきた以上は「死」へと向かって進んでいる。誰にでも必ず訪れるものである。しかし、分かっているにもかかわらず、それはあまりにも漠然として恐ろしく、考えることを無意識に避けてしまう。だから私は「死」について深く考えたことはない。この本は私に「死」によって失ってしまうものと、それでもなお生き続けるものについて、考えるきっかけを作ってくれた。

この本に登場する三人の少年。ある夏、少年のひとりの祖母

が亡くなったことをきっかけに、「死」に対して興味を持ち始める。それはかなり変わったもので、「人の死ぬ瞬間を見てみたい」という好奇心であった。そうして少年たちは、町外れにひとりで、生ける屍のように暮らすおじいさんの死ぬ瞬間を見るために、毎日、観察するようになる。悪趣味であり、ただの好奇心としては片付けられない不謹慎な行動である。おじいさんは、観察されていることに気付き、少年たちに対して嫌悪感を露にする。しかし、最初は怒っていたおじいさんは、少年たちに少しづつ心を開いていく。きつと、ひとりで話し相手もおらず寂しかったのだろう。少年たちの動機は、おじいさんの死ぬ瞬間を見てみたいという不純なものであったが、おじいさんとしては自分に興味を持ってくれたことが嬉しかったに違いない。

少年たちはおじいさんと過ごすことにより、包丁の使い方やペンキの塗り方、庭の手入れなど、様々なことを教わり習得していく。しかし、この交流は長くは続かなかった。生きる屍状態から元氣を取り戻しつつあったおじいさんであったが、少年たちが四日間のサッカー合宿に行っている間に眠るようになくなってしまった。おじいさんは、図らずも、「死」について知ることがしていた少年たちに、身をもってそれを教えた形になった。そして私にも、「死」について考えるきっかけを与えてくれた。

死をもって、人間の人生は終わる。最後は骨だけとなり、こ

の世には存在しないものになってしまふ。しかし、人間が生き  
ている間に残したものは、世の中に存在し続ける。その人が作  
った作品だったり、功績だったり、または教え伝えた事であつ  
たり。おじいさんはそんな「死」によつても失われないものを  
教えてくれたのだ。その教えられた「こと」が生きている人た  
ちに幸せを与えたり、人生の標となるならば、「死」をもつて  
人間の人生は終わりとは言えないのである。実体を失つただけ  
で、ひとりの人生は、その人に関わつた者たちの人生に引き継  
がれていく。

母の作る卵焼きがまさしくそうだ。この卵焼きは、今は亡き  
曾祖母から引き継がれているものだ。曾祖母が生きていた頃  
は、生まれていなかった私を満足させ、幸せにしてくれている。  
曾祖母の卵焼きの味は、確実に今、この世に存在しているのだ。  
このような考えに及ぶことは一切なかった。「死」とはすべて  
の終わりを意味し、恐ろしいものと思つていた私にとつて、  
「死」によつても失われないものを見つけたことは、大きな希  
望だ。

私も一生懸命に生きて、何かを残していきたい。将来の夢も  
見えてきた。私の知識や経験を教え伝えることができる教師と  
いう職業がそれだ。子どもたちに勉強を教えることはもちろん  
だが、おじいさんのように、逞しく生きていくための術を伝え

ていけるような教師が理想である。

私が小学校一年生の頃、担任だつた先生から贈られた色紙が  
今も机の前に貼つてある。それには、「苦しい時こそ笑顔」と  
書かれている。この言葉は、私が成長するにつれて心に響くよ  
うになつてきた。この色紙をもらった当時は意味をよく理解で  
きなかったが、今なら分かる。きっと、これから、悩んで辛い  
時、私を奮い立たせてくれる言葉になるだろう。このように、  
私も子どもたちの心にいつまでも存在できる教師になりたい。

まずは、一生懸命に生きよう。一度きりの人生だから、後世  
に何かを残したいという気迫で夢に向かって努力していきたい。  
母が曾祖母から引き継いだ甘い卵焼きを食べ、それを力に変え  
て。

体験書籍

『夏の庭—The Friends—』湯本香樹実・著

## 選考委員による選評

### 優しく肩を組んで

辻原 登

『ゼノフォビアと難民問題』（武田萌）。

ゼノフォビア (xenophobia) という言葉をはじめて知った。

武田さんの文章は鋭く私の無知を突いて、しかし、突きながら、優しく肩を組んで、私たちの中に根深いゼノフォビアからの脱却の道をさし示してくれる。それは、読書の体験を、彼女の旅（留学）の経験に思慮深く重ねる柔軟な文章によるものだ。

『見えない魔物との付き合い方』（渡会由貴）。

渡会さんは聴覚障害者である。「KY語」という言葉を知っているだろうか、という冒頭の問いかけの文章はただの問いかけではない。「歯が立たず、ほぼ絶対的な支配力を持つ空気はまさに魔物である」。「KY語」で人を裁き、おとしめようとす

る無知で残酷で鈍感な人々と風潮への静かな抗議の文である。

『「二番目の悪者」が笑うこの世界』（國岡志帆）。

二番目の悪者は、「軽い足取り」で私達の間を駆け巡り、そ

の裏に隠し持った強大な力でこの世界を一変させようとしている。だからこそ、彼らに対抗し、戦う人になるには本を読む人間、つまり静かに思考する人間になることが必要なのだと訴えかけてくる。

『地図を歩く』（川岸夕夏）。

地図を歩くには、「現実」が必要だ。地図はいつぶう変わった文章なのだ。文章が文章だけで成り立たないように、地図は地図だけで存在しない。それを読む人間と、地図が現わした現実の街や山や川がなければならぬ。川岸さんの文章は、その発見の喜びを伝えて余すところがない。

『山に魅せられて』（松下ひかり）。

松下さんはいつも「父と二人、歩くことに集中する」。しかし、新田次郎の『孤高の人』は同じ山行でも、たった一人で孤独の限界まで突きつめる。「山そのものではなく、登山という行為の中に」何かを求める。小説中の人物と、松下さんが山行から得たものは明らかに違う。山の美しさや雄大さか、それとも孤独の深遠さか。松下さんはその岐路に立って考える。いつか父と二人でなく、一人で登る時……。答えは出るだろうか。そのことへの恐れと期待の余韻を残して文章は終わる。

『言葉を超える「お話」』（西岡美空）。

本当に伝えたいことを伝えるにはどんな方法がいいのだろうか。声の言葉、文章の言葉。文章の言葉ならまず手紙を書く

いう方法、あるいは「お話（物語）」にして差し出す方法。どの方法が一番でも二番でもない。声の言葉、手紙の言葉、「お話」の言葉。言葉、つまり「表現」を西岡さんは、発達障害の妹さんと共に見つけていきたいと結ぶ。

『私の在り方』（公文琴音）。

「自分でも分からない本当の自分の存在。きっとそれが分かっ  
てしまうと人は弱くなるのだろう」「十七歳にしてようやく自  
分を理解した時にとつともなくさびしい気持ちになった。今ま  
で自分の中で保ってきた何かがいっせいに崩れ落ちた音がした」  
「自己をあらわす場所がない人はさびしい人だ。だがとても強  
い人だ」。

これらはみなすぐれて反語的意味合いにみちたニーチェ的箴言だ。しかも公文さん独自のものだ。

『「死」によつても失われぬもの』（増田悠斗）。

死とは何か、と考えることは、じつは生について思いをめぐ  
らせることだということを、増田さんは読書体験そのものより  
も、お母さんの卵焼きから会得する。一篇の小説よりも、曾祖  
母から伝わる「甘い卵焼き」のほうが食べごたえだけでなく読  
みごたえがあるのだ。一冊の本よりも学ぶべきことが多いのは  
曾祖母の卵焼きであり、彼女の人生なのだ。なぜなら曾祖母の  
人生こそ、かけがえのない一冊の本なのだから。

## 見える問題と見えない問題

穂村 弘

『ゼノフォビアと難民問題』では、現在の世界における大きな  
問題を取り上げている。留学後の再読時には、「以前は気にも  
留めなかつた言葉」が強く意識されるようになったという。ま  
た、それについて作者は「個人としてではなく、まとめてよそ  
者として扱われる」と自分自身の言葉でまとめている。留学と  
読書という二つの体験が思考によって血肉化されているようだ。  
最後に民族間の意識の壁が乗り越えられた例として、「ストリ  
ートサッカーチーム」のエピソードが語られていて考えさせら  
れる。世界の全員が参加できるサッカーチームは、どうしたら  
作れるのだろうか。

『「二番目の悪者」が笑うこの世界』も、やはり現在の大問題  
に着目している。難民問題との違いは、「二番目の悪者」は目  
に見え難い、という点だ。しかし、それは「この世界に甚大な  
影響を与えている」のだ。作者は自身の体験を通して、これを  
可視化しようとする。その結果、自分自身の中にもその影を見  
出す。この展開がスリリングだ。

『見えない魔物との付き合い方』もまた、タイトルにあるよう

に見えない問題を扱っている。そして、「感音性難聴」という事情をもつ作者にとって、「空気」という日本特有の「見えない魔物」は一層高い壁なのだ。「わかった？」と聞かれた時に、「ついでにいつもの微笑みで答えてしまった」というくだりに胸を衝かれた。無意識に魔物に従っている我々は、自らの曖昧な「微笑み」の意味を、そんな風に鋭く意識化することはできない。

『地図を歩く』は新鮮な一篇だった。読書体験記は、現実の悩み↓その悩みに関わるテーマの読書↓気づき↓成長、という流れをとることが多い。そのパターンを見事に崩しているのだ。人生に引きつけすぎない楽しみのための読書体験、しかも「地図」というところが恰好いい。

『山に魅せられて』では、そのリズムミカルな文体に惹かれた。「青い雲海と空の境が徐々に白み始めた。朝日だ」「あの人も、この鼓動を聞いただろうか」「八月十一日、カレンダーの数字は赤い。祝日『山の日』である」といった文章には、音読したくなるような魅力がある。

『言葉を超える「お話」』では、本の内容以上に、その形式に意識を向けていることに注目した。「重松清はこの『お話』を少年と同じく吃音で悩む一人の少年に向けて書いたとしている」。だが、「なぜ、『お話』という形式をとったのだろうか」。そこから翻って、「なぜ、妹は手紙という形式をとったのだろうか」と自ら省みるところが素晴らしい。特別な眼差しを感じる。

『私の在り方』では、他者の言葉によって照らし出される自己像への考察が印象的だった。「悩みとかなさそう」という周囲の人々の言葉、また「自己をあらわにせよ」というニーチェの言葉、それらから「本当の自分」を見つめ直そうとする姿に惹かれた。

『「死」によっても失われないもの』は、「私は母の卵焼きが大好きだ」という一文から始まる。この日常的で素朴な実感の意味が、一冊の読書を通して深く問い直されるところがいい。そして、それはやがて「私」の核となるはずの死生観にまで結びついてゆく。

## 読んで考える、考えて読む

角田 光代

武田萌さんが『路上のストライカー』を読み、『ゼノフォビアと難民問題』で取り上げた主題は非常に今日的な問題である。この本との出会い、自身が住む沖縄での見聞、短期留学先での体験、そうしたものが、移民や差別といった大きな問題を、武田さん個人に、より身近なものにしたのだろうと思う。それだけこの文章には説得力がある。ここにまとめたよりもっと多くを武田さんは考えているだろうし、今後とも考えていくことになるだろう。そのことをとても頼もしいと思う。

渡会由貴さんの『見えない魔物との付き合い方』にはどきりとさせられた。私も無意識に他人に合わせってしまうことがあるからだ。障がいがある無しにかかわらず、また、年齢や経験の如何にかかわらず、だれしも身に覚えのある思いと、その思いの持つ危険性をめぐるとらえた文章である。

『「二番目の悪者」が笑うこの世界』は根っこのない悪意を巧みに描いている。情報を鵜呑みにしない、自分の頭で考えることを放棄しない、という國岡志帆さんの文章はじつにキリリとして力強い。

川岸夕夏さんの『地図を歩く』は、抜群にすぐれた文章力で、地図を介した世界との向き合い方を描いている。地名ひとつが過去を生き生きと見せ、ちよつとした「ずれ」が歴史を立ち上げらせる。立体的な地図の読み方が印象的だ。

松下ひかりさんの『山に魅せられて』は、読んでいる私にも広々とした空や木々のおい、山と対峙する自分のちいささを味わわせてくれる。本を読み、何か感じとることも、山を歩き、何か考えることも、どちらもたつたひとりりでやらねばならないことだ。本にも山にも松下さんの思考の足跡が残っている。

『言葉を超える「お話」』のなかで、西岡美空さんは、小説のあらずじそのものではなく、なぜ「ほんとうに伝えたいこと」を、そのままではなく、お話に託すのか、と考える点がユニークで印象深い。さらりと書いてあるように見えるが、深い考察だと思ふ。

公文琴音さんの『私の在り方』はとても印象に残った。読書体験記では多くの方が、読書を通じて自分の欠点に気づき、その欠点を克服しようとする。そう書くことが、暗黙のルールのようになっているのは否めない。でも公文さんは、ニーチェと会話するように読書していくなかで、あなたの欠点は欠点ではないと教えられる。悩みがなさそうと言われながら悩みを持つひとりの少女が、ニーチェという味方をひとり得たことで強くなるさまが描かれていて小気味いい。

増田悠斗さんは『死』によっても失われないもの』で、死の後のことを考えている。人が死んだ後に残せるもの。創作物や功績を残す人もいるだろう、でも、もっとささやかなものも残り、受け継がれていくと書く。料理の味や、ちよつとした言葉、ささやかな人の営みが、消えずに残っていくことを指摘する。読書を通して死について考えることで、私たち人間に連続と受け継がれている何かについて、増田さんは考えている。

読書は、人を成長させるばかりではないし、難題を克服させてくれるわけでもない。書物はあなたの武器にはならない。もしかしてあなたの味方もしないかもしれない。成長のための、前を向くための、強くなるための、つまり「ためになる」読書ではない、無駄かもしれないけれど多様な読書に出会ってほしいと思います。

## 心を磨き、豊かな人生を！

文部科学省初等中等教育局主任視学官

清原 洋一

今年の最終審査に残った十五作品、いずれも読書を通して深く考え、心や行動が様々に変化している様子が描かれています。そればかりでなく、それらを素直に上手に表現していて、心にすんなりと入ってくるすばらしい作品ばかりでした。

文部科学大臣賞に輝いた武田萌さんの作品は、難民問題について綴られた本を留学を終えた後に再度読み返し、考え方や気持ちに変化した様子を巧みに描いています。留学中に難民の子と友達になるという経験、滞在先の隣町で移民の子どもたちが殺されるといふ事件なども重ね合わせ、問題の背景にある差別の意識や偏見について真剣に考えています。本を読んで心に鋭く突き刺さったフレーズ、日本や沖縄での差別の問題などを交えながら、その根本的な原因は相互の不理解にあり、解決の糸口は一人の人間として見ることはないか。グローバル化が一層進む社会を生きていく上での決意を示したと感ずる作品です。

全国高等学校長協会賞に輝いた二人も、すばらしいものです。

渡会由貴さんの作品は、日本人の空気を敏感に察知する特性の中でどのように生きるかを考えさせられるものです。「空気」という見えない魔物の中で、必死で話の内容を捉えようとするあまり誤った判断をしてしまう自分、一方で、相手の誠意に応えようと曖昧な微笑みを浮かべてしまう自分、本を読み考えたことを率直に表現しています。その場の空気に従うべきか否かを判断し、時には空気を乱してでも自分の判断に従う勇気が必要だ。その言葉にも迫力が感じられます。

また、國岡志帆さんの作品も、実に思慮深いものがあります。『二番目の悪者』という本から、嫌がらせを受けた二度の経験と結び付けて考えただけでなく、いじめ問題やネット社会がかかえる問題についても思考をめぐらしています。最初の悪意をもった悪者も問題ではあるが、何気なく陥れられてしまう「二番目の悪者」は次々と伝染し、大きな嫌がらせへと発展してしまふ。同様の罪を、もしかしたら自分自身も犯しているのではないか。多くの人も犯しているのではないか。「らしいよ。」で広がる噂、ネット社会での問題点やその本質について考え、見事に表現しています。

一ツ橋文芸教育振興会賞に輝いた五作品も、心に自然に響いてきました。短い言葉ですが、私を感じたことについて示したいと思います。

川岸夕夏さん、地図はただ行き先を示すという役割を果たす

だけではなく、自分の歩みを振り返り考える時を与え、明日への手がかりにもなる。その心情が、文章に素直に表現されています。

松下ひかりさん、『孤高の人』という本との出会い、それと父との登山を対比させながら考え感じたことを見事に表現しています。そして自分もやがては一人で歩めるようになる。そんな決意が伝わってきます。

西岡美空さん、本の中の吃音の少年との出会いから、思いを伝えることの大切さについて様々な角度から考えています。それだけでなく、自分にしかできない「表現」を妹とともに見つけていくという意志が伝わってきます。

公文琴音さん、一冊の本との出会いから自分自身と正面から向き合い、自分の在り方についての気付きを素直に表現しています。また、本との出会いを劇的に描いていたこともすばらしいと思います。

増田悠斗さん、「死」によって失ってしまうものと失われないうものがあることを、曾祖母から受け継がれた母の作る卵焼きと結び付けながら表現しています。そして、今後の生き方への決意が伝わってきます。

これからも読書を通して深く考え、心を磨き、豊かな人生を送ることを願っています。

## 体験と深化

全国高等学校長協会

角 順 二

『ゼノフォビアと難民問題』(武田萌)は、『路上のストライカー』の読書体験記で、実際に自分もスウェーデン留学中に難民の男の子と友達となったが、自分の中に難民をよそ者と認識し、嫌悪感をもっている意識があることに気づき、そこから難民問題について考えを深めていく過程が書かれている。「違う民族同士が共に生きていくのはそんなに難しいことなのだろうか」「根本的な原因は相互の不理解なのではないだろうか」と問題提起をしながら、本の内容と自分の体験から、「様々な人種が共生するための糸口」を提示していく。そして、重要なことは、『難民』というくくりで彼らを見ることから、難民を「一人の人間として見る」ことへの「変化」だと指摘をしていくが、それが自己の体験と本の中で描かれている「事実」を根拠にして導き出されていることもあり、読む人も十分納得できる内容となっている。

『見えない魔物との付き合い方』(渡会由貴)は、『空気』の研究』を読んで、それまで意識したことがなかったこと、日本

人が「空気」を大切にしていることに気づかされ、その「空気」に従って誤った行動をした自己の経験等についても直視しながら、「空気はまさに魔物である」「流されるばかりでは、取り返しのつかない失敗を招く」と警鐘を鳴らしている。そして、そうならないためには「時には空気を乱してでも自分の判断に従う勇氣」を持たなければならぬが、それは、決して「教えられて身につくものではない」等、「生きる力」を身に着け、高めていくうえでも重要な指摘となっていることも評価したい。

『二番目の悪者』が笑うこの世界』(國岡志帆)は、『二番目の悪者』を読んで、その本で描かれていることと自己の体験等の現実という二つの世界を重ね合わせるようにしながら、「日常生活に隠された闇」があることを、自分を含めたすべての人が課題としてとらえることの必要性や重要性等を指摘していく。そして、『考えない、行動しない、という罪』は私達が無意識の内に犯すことが可能な罪」、本当に悪いのは「真の悪人」だが、本当に怖いのは、「直接、真実を確かめようともせず」、それに便乗する多勢である「二番目の悪者」。しかも、彼らの「存在と罪の意識は真の悪者の影に隠れ、掴みにくい」ので、「自らが気付き、改めようとする機会も掴みにくい」等と、昔も今も変わらない「闇」の姿を明らかにしていく。だから、それに気づいた者から「二番目の悪者」にならないよう行動することが重要だと締めくくったのだと思う。

『地図を歩く』（川岸夕夏）からは、『地図の中の札幌』という地図を片手に、実際に街を歩いたり、自分の思い出等と対話したりすることの楽しさ、発見の喜び、郷土への愛着のようなのがよく伝わってきた。『山に魅せられて』（松下ひかり）は、『孤高の人』の主人公、加藤文太郎と自分を重ね合わせたり、対比させたりしながら、「孤独」について考えを深めていく過程が、「自立」「責任」「成長」等といった人の生き方と関連付けながら爽やかに書かれていた。『言葉を超える「お話」』（西岡美空）は、『きよしこ』を読んで一度「妹の『きよしこ』に私になる」と考えるが、そのことに疑問を持ち、考えを深めた結果、初めの自分の考えを否定することにはなるが、本当に大切なことは何かに気づくという構成・展開が効果的だった。『私の在り方』（公文琴音）は、『超訳 ニーチェの言葉Ⅱ』を読んで、自分の生き方の転機を迎えるという衝撃的な精神のドラマのような内容であったのが強く印象に残った。『死』によっても失われないもの（増田悠斗）は、『夏の庭—The Friends—』を読んで、「死」という高校生があまり考えることのない難しいテーマに挑戦し、死は「すべての終わり」ではないという認識を持つに至るまで考えを深めたところを評価したい。

＊第三十六回「全国高校生読書体験記コンクール」全入賞者一覧＊（敬称略）

【文部科学大臣賞】

一編

沖繩県 県立 那覇国際高等学校

三年 武田 萌

ゼノフォビアと難民問題

【全国高等学校長協会賞】

二編

千葉県 国立 筑波大学附属聴覚特別支援学校高等部  
 広島県 県立 大門高等学校

一年 渡会由貴  
 三年 國岡志帆

見えない魔物との付き合い方  
 「一番目の悪者」が笑うこの世界

【一ツ橋文芸教育振興会賞】

五編

北海道 道立 札幌南高等学校  
 静岡県 県立 掛川西高等学校  
 兵庫県 県立 香寺高等学校  
 高知県 私立 高知学芸高等学校  
 宮崎県 県立 宮崎西高等学校

二年 川岸夕夏  
 二年 松下ひかり  
 一年 西岡美空  
 二年 公文琴音  
 一年 増田悠斗

地図を歩く  
 山に魅せられて  
 言葉を超える「お話」  
 私の在り方  
 「死」によっても失われないもの

【優良賞】

三九編

青森県 私立 松風塾高等学校  
 岩手県 県立 一関第一高等学校  
 宮城県 県立 白石高等学校  
 秋田県 県立 秋田西高等学校  
 山形県 県立 米沢興譲館高等学校  
 福島県 県立 橘高等学校  
 茨城県 県立 水戸第一高等学校  
 栃木県 県立 宇都宮女子高等学校  
 群馬県 県立 前橋女子高等学校  
 埼玉県 私立 星野高等学校  
 東京都 私立 学習院女子高等科

三年 佐久間 巧  
 二年 菅原由乃  
 一年 我妻杏南  
 二年 鷹島由季  
 一年 曾根京香  
 一年 遠藤亮佑  
 二年 原口真緒  
 三年 黒尾紗文  
 二年 宮崎なな美  
 三年 塚田珠代  
 二年 小熊可菜海

強い味方―天国の祖母―  
 再出発  
 生きるということ  
 もしも平行世界があるのなら  
 前に進む  
 平和のバトン  
 「のぼう」に学ぶ真の「リーダー」像  
 私を積み重ねる  
 現代を上手く生きるために  
 最後に残される記憶  
 対話に隠れるエネルギー

神奈川県	県立	平塚中等教育学校	五年	小野田彩子	読書の魅力と言葉の魔法
新潟県	県立	高田北城高等学校	一年	加藤みなみ	聞こえるということ
富山県	県立	富山いずみ高等学校	三年	安守 奏	私の大切なもの
石川県	国立	金沢大学附属高等学校	一年	小川楽生	愛すべきひとの喪失
福井県	県立	福井商業高等学校	一年	行壽優衣	アンサンブル〜37人のところを一つに〜
山梨県	県立	都留高等学校	一年	山下結衣菜	ルイス・ミシヨールさんから学んだこと
長野県	県立	屋代南高等学校	二年	長田愛美	NO KOZUKI NO LIFE
岐阜県	県立	岐阜北高等学校	一年	若山実祐希	「蓮の花」のように生きる
愛知県	県立	豊田西高等学校	二年	江波戸梨帆	平和に埋もれた幸福
三重県	国立	鈴鹿工業高等専門学校	三年	浮田菜央	キラリンのような
滋賀県	県立	高島高等学校	一年	中川路 梓	ひとはひとりでは生きていけない
京都府	市立	京都市立呉竹総合支援学校高等部	二年	森本京華	「オトちゃんルール」と私
大阪府	府立	天王寺高等学校	二年	松永向日葵	「ツナグ」思い
奈良県	県立	高田高等学校	一年	村田美音	二度とない今日の「キッチン」
和歌山県	私立	智辯学園和歌山高等学校	二年	土井美裕子	孤独に他者と生きる
鳥取県	県立	鳥取西高等学校	二年	岩本紗季	親とのキヨリ
島根県	県立	出雲高等学校	二年	布施美咲希	人生の教科書への答え
岡山県	県立	倉敷天城高等学校	二年	五十嵐初葉	夏の冒険
山口県	県立	熊毛南高等学校	一年	松浦里南	カルテに書かれた一日
徳島県	県立	脇町高等学校	二年	藤本歩優	いつか、やがて、きっと
香川県	県立	高松高等学校	一年	大井健太郎	カラフルな自分へ
愛媛県	私立	済美高等学校	二年	新名茉帆	『ツナグ』
福岡県	県立	筑紫丘高等学校	二年	藤崎毬衣	李徴と私
佐賀県	県立	佐賀西高等学校	一年	田中 結	この夏の挑戦
長崎県	県立	猶興館高等学校	一年	今野僚香	事実を見極める
熊本県	私立	九州学院高等学校	一年	酒向由莉	ひとりの力
大分県	県立	大分上野丘高等学校	三年	小手川由莉	文明の前進にむけて
鹿児島	県立	加治木高等学校	三年	松尾一沙	文学の力〜ある物語との出会い〜

北海道	道立 旭川東高等学校	二年	堤 葉月	創作と向き合
	道立 帯広柏葉高等学校	一年	吉家うらら	人生と美しさ
	道立 北広島高等学校	二年	野村 萌	糸の切れる音がした
	道立 札幌南高等学校	二年	佐藤たまお	茫漠たる世界で
青森県	県立 青森北高等学校	一年	溝江菜畝	私の空腹と幸福を膨らませた本
	私立 松風塾高等学校	三年	坂本真慧	二つの被災地への祈り
	私立 松風塾高等学校	三年	福士 希	生きるヒント
	県立 八戸中央高等学校	三年	田守夏海	なるべき形
岩手県	県立 一関第一高等学校	一年	金野さゆり	「未来の鬼」と「今の鬼」
	県立 盛岡第三高等学校	三年	佐藤薫乃	「いい子」たちの記憶
	県立 盛岡第三高等学校	二年	佐藤風花	私の中に隠れた私を見つけた私
	県立 盛岡第三高等学校	一年	佐々木響未	縛られた心
宮城県	県立 白石高等学校	二年	平井愛純	秘める火
	県立 仙台二華高等学校	一年	佐々木風美	三年後の答え
	県立 仙台二華高等学校	一年	早坂凜花	心との付き合い方
	県立 仙台南高等学校	二年	湯村 愛	言葉と心の結び付き
秋田県	県立 大館桂桜高等学校	一年	池田鈴佳	『青空エール』
	県立 大館桂桜高等学校	一年	成田乃愛	『十字架』を読んで
	県立 十和田高等学校	一年	萩原佑弥	僕たちの壮大な夢
	県立 十和田高等学校	一年	菩提野勇人	勝利への一歩
山形県	県立 上山明新館高等学校	二年	塩野陽香	くちびるに歌を最後の時まで
	県立 新庄北高等学校	二年	阿部啓史	スタート
	県立 新庄南高等学校	三年	林 佑香	「今しかない人生」を大切に
	県立 山形工業高等学校	三年	森谷宥香	新しい出発
福島県	県立 会津高等学校	二年	渡部彩乃	眠る父と過ごした夏
	県立 安積黎明高等学校	二年	大塚朱莉	足りないものを求めて
	私立 郡山女子大学附属高等学校	三年	本田 奏	想い繋ぐ

茨城県	県立	福島県立盲学校高等部	三年	小椋汐里	ヴァイオリンに導かれて「一票」
	県立	鹿島高等学校	二年	角屋愛香	色鮮やかな世界と心
	私立	水戸啓明高等学校	二年	岡安公貴	気持ちの変化
	県立	水戸第一高等学校	一年	笠倉真衣	変えろ、視点
	県立	水戸第一高等学校	一年	矢ノ倉萌	言葉の海を渡る舟
栃木県	国立	小山工業高等専門学校	三年	鈴木のどか	飛び越える勇氣
	国立	小山工業高等専門学校	三年	矢島夏海	内面と客観性
	国立	小山工業高等専門学校	一年	野沢美友	綱渡り
	県立	栃木女子高等学校	二年	川又悠香	穏やかな死―治療よりも大切なこと
群馬県	私立	共愛学園高等学校	二年	伊藤万莉	太宰治の生涯から学んだ人としての戦い方
	県立	渋川女子高等学校	三年	星野愛理	私の下ごしらえ
	県立	高崎女子高等学校	一年	山田知穂	守り抜くもの
	県立	前橋女子高等学校	一年	岸 真美	評価に囲まれる私たち
埼玉県	県立	坂戸西高等学校	一年	大平彩花	「仲間」とは
	県立	坂戸西高等学校	一年	千島友樺	あきらめない強い気持ち
	私立	星野高等学校	一年	沼上晃大	三・一一の記憶
千葉県	国立	筑波大学附属聴覚特別支援学校高等部	三年	渡邊千春	人工知能と私
	国立	筑波大学附属聴覚特別支援学校高等部	二年	牧野一哉	言葉の力
	国立	筑波大学附属聴覚特別支援学校高等部	一年	伊東碧海	咲く日まで
	国立	筑波大学附属聴覚特別支援学校高等部	一年	植草瑞輝	ロックンロール！
東京都	私立	学習院女子高等科	二年	濱田安里子	文字
	私立	女子学院高等学校	一年	渡邊あかね	彼女が遺してくれたもの
	私立	東京農業大学第一高等学校	三年	山田虎之介	『横道世之介』を読んで
	私立	早稲田大学大学院	三年	大森陽平	今の自分がすべきこと
神奈川県	私立	湘南学園高等学校	一年	加藤 慧	透明な、レンズのような
	私立	聖セシリア女子高等学校	一年	松下萌々夏	孔子と競技かるた
	県立	平塚中等教育学校	四年	米田大晟	ハーンの愛した日本
	私立	フェリス女学院高等学校	一年	徐 原	母との記憶を探す道
新潟県	私立	第一学院高等学校 新潟キャンパス	三年	川瀬結芽子	今を生きるための道しるべ

新潟県	県立	長岡高等学校	一年	齋藤淑人	成長と孤独
	県立	新潟高等学校	一年	伊藤美紗希	患者に寄り添い、支える医療
	県立	新潟高等学校	一年	渡部真帆	生物学から考える「私たち」
富山県	県立	高岡南高等学校	一年	林 理心佳	♪今を、生きる♪
	県立	砺波高等学校	二年	浅島舞美	黒い雨を忘れるな
	県立	砺波高等学校	二年	加藤誠己	人生を彩るために
	県立	富山商業高等学校	二年	土肥千詠美	『螢川』
石川県	県立	金沢泉丘高等学校	二年	森田祐生	行方
	県立	金沢錦丘高等学校	二年	白澤あまね	私の森の羊たちへ
	県立	金沢西高等学校	二年	荻野さつき	思いやりの大切さ
	県立	金沢二水高等学校	一年	宮谷 翠	心と向き合う
福井県	県立	高志高等学校	三年	本田優衣	『君の臍臓をたべたい』を読んで
	県立	高志高等学校	三年	向山知花	本当の自分『あしたの私のつくり方』を読んで
	県立	藤島高等学校	一年	手賀梨々子	私が歌を歌うわけ
	県立	美方高等学校	一年	木下絢加	アドバイスを求めて
山梨県	県立	甲府南高等学校	一年	芦澤さや	命あるものを大切に。
	県立	甲府南高等学校	一年	小平守莉	成長の糧
	県立	都留高等学校	二年	山本悠希	さよならを言えるように
	私立	山梨英和高等学校	二年	日原 彩	命の期限
長野県	私立	松本第一高等学校	二年	塩原咲希	後悔しない生き方とは何か？
	私立	松本第一高等学校	二年	福田智代	猛獣を飼い慣らす
	私立	松本第一高等学校	一年	藤村 滉	象からもらったたくさんの課題
	私立	松本第一高等学校	一年	山本美桜	自分は自分、人は人
岐阜県	県立	大垣北高等学校	二年	金森朱音	私は、自由だ、
	県立	大垣南高等学校	二年	渡邊衣利佳	病と共に
	県立	岐阜北高等学校	二年	鳥村和宏	他人の幸せのために
	県立	岐阜北高等学校	一年	古澤香帆	つながり
静岡県	県立	静岡県立中央特別支援学校高等部	二年	松下星矢	違うからいい
	私立	静岡雙葉高等学校	一年	伴野綾香	欺瞞に満ちた優しさだとしても

愛知県	県立	榛原高等学校	三年	山本奈央	未来を決める権利
	市立	浜松市立高等学校	三年	塚田夏織	忘れない、つなぎたい
	県立	一宮高等学校	一年	只井遙菜	「想い」を手紙に込めて
	県立	国府高等学校	二年	齋藤 航	夢でなく「計画」を追う
	県立	豊田西高等学校	一年	鈴木陵仁	支えて、支えられて
	県立	豊田東高等学校	一年	松野陽奈	大切にしたい三つのこと
三重県	私立	高田高等学校	一年	石原 歩	対人力とは
	私立	高田高等学校	一年	谷 英恵	陸上と人生
	私立	高田高等学校	一年	林 志帆	姉と妹
	私立	名張西高等学校	二年	石山鮎奈	『西の魔女が死んだ』を読んで
滋賀県	県立	安曇川高等学校	二年	小林海景	吹奏楽で学べること
	県立	安曇川高等学校	二年	豊島帆乃香	『青空のむこう』
	県立	高島高等学校	二年	横井綺華	選択
	県立	東大津高等学校	二年	田中すず	古典は今も生きている
京都府	府立	桂高等学校	二年	ゴンゾン恵織ネルキ	紛争地の子供たちと私の夢
	私立	京都女子高等学校	二年	徳永 楓	「今」を生きる私の思い
	府立	西乙訓高等学校	一年	清水達也	ロボットの心
	私立	立命館高等学校	二年	富岡亜衣	幸せな時間
大阪府	府立	河南高等学校	二年	浅井夏海	過去を解放して
	府立	河南高等学校	一年	松本巴那	大きな愛
	府立	三国丘高等学校	一年	萩原崇徳	本を読むということ
	府立	三国丘高等学校	一年	片田陽菜	努力する勇氣
兵庫県	県立	柏原高等学校	一年	大和田時生	『天音』
	私立	賢明女子学院高等学校	一年	井上和泉	諦めない心
	県立	姫路東高等学校	二年	地内秀太	夢幻泡影
	県立	兵庫県立農業高等学校	二年	太田 蘭	明日の私たち
奈良県	県立	畝傍高等学校	二年	西村 諒	孤独
	県立	畝傍高等学校	一年	奥本嵯由美	感謝の気持ちは時を超えて―姉から託された命のバトン―
	県立	橿原高等学校	一年	上村歩未	私たちがつないでいく

奈良県	県立	橿原高等学校	一年	中原千春	勉強という道具を使いこなしたい
和歌山県	私立	智辯学園和歌山高等学校	一年	辻 真優	「幸せ」とは
	私立	智辯学園和歌山高等学校	一年	中屋侑華	おべんとうとその向こう
	私立	智辯学園和歌山高等学校	一年	松下ひまり	誰かのために
	私立	和歌山信愛高等学校	二年	御前友実	「青春」とは
鳥取県	県立	境港総合技術高等学校	三年	宮崎咲良	私の愛く『漁港の肉子ちゃん』を読んで
	県立	鳥取西高等学校	二年	花木野々花	青春の曲
	県立	鳥取西高等学校	一年	濱辺美玲	置かれた場所で咲きなさい
	県立	米子東高等学校	一年	山中雅子	飛翔
島根県	県立	出雲工業高等学校	三年	橋本春貴	スタートライン
	県立	益田高等学校	二年	岡崎智哉	地域とのつながり
	県立	益田翔陽高等学校	二年	寺田彩乃	私たちが問われているんだ
	県立	松江北高等学校	一年	末田 光	世界を理解するために
岡山県	県立	笠岡高等学校	二年	廣畑早耶	進路に悩む高2が夏休みにビリギャルを読んで更生した話
	県立	倉敷天城高等学校	二年	中原咲季	スパイク
	県立	倉敷天城高等学校	一年	船越 楓	曾祖父がつかないでくれたもの
	県立	玉野光南高等学校	一年	藤原 凜	冒険は身近
広島県	市立	広島市立沼田高等学校	二年	平田ひなの	「語り継ぐ」ということ
	市立	広島市立沼田高等学校	二年	宗利優璃	チーズを探して
	市立	広島市立美鈴が丘高等学校	一年	児玉涼太	世界から僕が消えたなら
	国立	広島大学附属高等学校	二年	宇津田 蒔	感じやすくありたい。小さな声がかきこえるように。
山口県	県立	熊毛南高等学校	一年	酒井玲那	進むべき道ゴールテープの向こう側へ
	県立	徳山高等学校	二年	仲保亜子	甘いから痛い
	私立	野田学園高等学校	一年	岩武駿輔	清と曾祖母
	県立	豊北高等学校	二年	永松未羽	きょうだい
徳島県	県立	城東高等学校	一年	笠井はな	私にとつてのキッチン
	県立	徳島北高等学校	二年	藤長ゆきの	学習の意味
	県立	徳島北高等学校	一年	谷崎そよ	本との再会から考える両親の愛
	私立	徳島文理高等学校	一年	山口幹子	『いなくなれ、群青』を読んで

香川県	県立	坂出高等学校	一年	宮武 陽	震災の記憶
	県立	高松商業高等学校	三年	藤田 葵	「咲く」努力を
	市立	高松市立高松第一高等学校	一年	金関あんず	生きている幸せ
	県立	丸亀高等学校	二年	新居詩織	コトバ
愛媛県	県立	宇和島東高等学校	一年	河野更紗	百年たつたら帰っておいで〜時間と想像力の世界〜
	県立	愛媛県立しげのふ特別支援学校高等部	三年	渡邊茉莉	比較
	県立	新居浜東高等学校	一年	横山 華	『博士の愛した数式』を読んで
	県立	松山南高等学校	二年	信田紗友華	十七歳の課外授業
高知県	私立	高知学芸高等学校	二年	石川 怜	好奇心が与えるもの
	私立	高知学芸高等学校	二年	江渕颯真	必然的な邂逅
	私立	高知学芸高等学校	二年	森本真以	「出会い」と「別れ」
	私立	高知農業高等学校	三年	大峯愛華	喜んでもらうために
福岡県	私立	小倉西高等学校	一年	北側優奈	『世界から猫が消えたなら』で気づく
	私立	修猷館高等学校	一年	佐々木美夕	私の「顔」を探す旅
	私立	筑紫高等学校	三年	井上佳奈	上を向いて
	私立	門司大翔館高等学校	一年	丸山由夏	私もカラフルでありたい
佐賀県	私立	有田工業高等学校	二年	池田美弥子	輝くとき
	私立	弘学館高等学校	二年	池邊悠里	星やどりが教えてくれたこと
	私立	佐賀西高等学校	一年	石橋岳大	「知る」ことの大切さ
	私立	致遠館高等学校	二年	中村恵弥	本物の友情とは
長崎県	私立	大村高等学校	一年	山下拓馬	境遇を越えて
	私立	佐世保西高等学校	一年	米岡朋紀	自分のすべきこと
	私立	長崎東高等学校	二年	徳永理子	変身と現実
	私立	長崎南高等学校	一年	田中茉貴	森の入口に立つ今
熊本県	私立	天草高等学校	一年	山口茜奈	向かい風を追い風に
	私立	九州学院高等学校	一年	藏原明日香	「正義の味方」にあこがれて
	私立	熊本高等学校	一年	古澤香織	普通の高校生とは
	国立	熊本高等専門学校	一年	池田 漠	マネージャーから見た甲子園
大分県	私立	大分上野丘高等学校	二年	磯貝ひかる	生きる意味を手にするために

大分県	県立 大分豊府高等学校	三年 丹野千春	青い鳥との冒険
	県立 大分豊府高等学校	二年 橋本涼太郎	「窓」を得て
	県立 杵築高等学校	三年 古庄久美	食べること、命、そして、おかん
宮崎県	私立 聖心ウルスラ学園高等学校	三年 河野安記	成熟した人間になること
	県立 宮崎大宮高等学校	一年 小川紗葵	本当の「記憶」
	私立 宮崎学園高等学校	二年 興梠ひより	生まれた奇跡
	県立 宮崎南高等学校	二年 河股大翔	『THE POWER OF HUMAN』『動的平衡』を読んで
鹿児島県	県立 加治木高等学校	一年 大野まどか	手の中の沈黙
	県立 武岡台高等学校	一年 末吉隼大	サンドイッチの思い出
	県立 鶴丸高等学校	二年 尾形 惇	押しつけない、押しつけられない
	県立 鶴丸高等学校	一年 安田日向子	見る。ちゃんと見る。
沖縄県	県立 首里高等学校	三年 岩崎彩音	「私」を変えた忘れられない本
	県立 知念高等学校	三年 大城真希子	この本が教えてくれたこと
	県立 那覇国際高等学校	二年 比嘉希波	伯母の記憶、私の記憶
	県立 普天間高等学校	二年 仲本優月	イチロー選手に学ぶ

上位中央入賞者八名の読書体験記、及び優良賞・入選作のお名前、  
 高等学校名は、左記の「ツ橋文芸教育振興会の読書推進活動」ホ  
 ムページに紹介されます(2月中旬予定)。  
<http://www.hitotsubashi-bks.jp/dokusho/>

表紙デザイン・中島慶章